

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

曾祖父と生命保険

福井県 小浜市立小浜第二中学校 三学年

竹原 彩夏

「ピーピーピー。ピー、ピーピー。」

まだ、たどたどしい指使いと息使いの私のフルートの音を、曾祖父はいつも優しい笑顔で、終始聴いてくれた。そして、

「彩夏ちゃん、昨日よりも上手になったね。」

と、いつも褒めてくれた。そのたびに嬉しく、温かい気持ちになれた。「ひいおじいちゃん。もっともつとうまくなって、素敵な曲が演奏できるように、頑張って練習するね。」

私の持っているフルートは、曾祖父に買ってもらった、大切な大切なフルートである。私には姉がいて、私も姉も幼い頃からピアノを続けている。練習をしていると、

「いい曲やね。ちょっと聴かせてもらってもいいかな。」

と言い、いつも傍で満面の笑みで見守ってくれた。ピアノコンクールに出場する時も、必ず応援に来てくれた。金沢や大阪、東京までも一緒に来てくれて、いつも温かい目で包み込んでくれていた。

「私のピアノの音が、みんなの心に届きますように。」

そう心で唱えながら、いつも曾祖父や家族への感謝の気持ちと一緒に、音を奏でていた。

私は家族が大好きである。家族のみんな、それぞれ大好きなのだが、家族の誰でも良いから手紙を書きなさい、などという課題が学校で出されると、必ず曾祖父あてに書いた。

曾祖父は九十歳を超えていたが、子煩悩でいつもニコニコと温かい笑顔で接してくれた。だれに対しても優しく、親切で、常に家族のことを最優先に考え、曾祖父自身のこととは、いつも後回しだった。

大好きな曾祖父は、二年半前に他界してしまった。私は曾祖父のことを想うと、脳裏に浮かんでくる光景がある。曾祖父との大切な思い出が脳裏を駆けめぐると、私はどんどん過去へとタイムスリップして、私のことを大切に想ってくれる人や、私を取り巻いている世界について深く考える。そして、私を支えてくれているみんなに対しての感謝や愛おしさが、心の奥底からあふれ出し、胸が熱くなる。

私は「生命保険」について、初めて深く考えた。保険は必要なのか。

第55回中学生作文コンクール

保険の役割とは何なのか、などを自分なりに考えてみた。保険とは、これから起こりうる不測の事態に対応するための備えである。一番のメリットは、契約締結時から「もしも」の時に保険金を受け取ることができる点である。健康である時に、病気や災害に遭うことを想像するのは、難しいかもしれないが、自分の人生を計画的に長い目で、冷静に見つめてみると、必ず保険のありがたみを実感する時が訪れるはずだ。

「生命保険」を通して、「生きる」ということについて、改めて考えさせられた。人は決して一人では生きてはいけない。人と人が支え合って、初めて人は生かされるのだと私は思う。これは、保険システムの構成と共通していると思った。保険会社は、「もしも」の時の備えだけではなく、「金融機関」として、会社や経済を支えている。目には見えないが、お互いに助け合っているのだ。

曾祖父が他界し、家族のために残してくれた保険金。大切すぎて、もったいなくて、使うことができない、と家族は言っていた。

「ひいおじいちゃん。私は、中学三年生になったよ。大切なフルートで、今日も一生懸命、練習してきたよ。もう少しで、部活も引退です。最後のコンクール、頑張るね。」

にっこりと笑っている仏間の曾祖父の写真に、私はそうつぶやいた。曾祖父は私に、さらに優しいまなざしで何かを応えてくれているように思えた。

目を閉じると、曾祖父と過ごした楽しくて温かい思い出で、胸がいっぱいになる。

キラキラと銀色にまぶしく輝くフルート。私の奏でる音が、曾祖父に届きますように。